

突如として新潟を襲った大地震は、かつて経験したことのない恐怖と混乱のどん底に落とし入れました。

昭和39年（1964年）6月16日午後1時02分、栗島南方沖深さ40kmを震源とするM7.5の新潟地震は、死者11人、負傷者125人、全壊（焼）家屋2338世帯、半壊（焼）家屋7595世帯、床上浸水10283世帯などの被害を出しました。（被害状況：「にいがた防災アクション2014ホームページ」<http://niigataishin.com/>）

信濃川沿いなどの低地帯で浸水したほか、震源に近い栗島は約1m隆起しました。新潟市では火災により昭和石油の石油タンクに引火し、約2週間炎が燃え上がりました。

また、鉄筋コンクリートの建物の多くが傾いたり沈んだりしました。さらに、竣工間もない昭和大桥の橋桁が落ちた他、道路の沈下や亀裂等の破損が多数ありました。その他港や飛行場、河川の堤防等にも被害がありました。

亀田郷1万町歩においても、農業・農業用施設に甚大な被害をもたらしました。至る所で農地が液状化現象で砂が噴出したり陥没、隆起、溜水被害など被害は広範囲に渡り壊滅状態でありました。特に石山・大形地区では通船川底の隆起で、堤防は400mに渡って決壊し、農地に浸水、各所には地下水が噴き出し、この地域の住民の証言によれば、煮えたぎる「アンコ鍋」さながらで、まさに地獄絵を見るような惨状であったとのことでした。

そのような中、激甚地帯の大形地区には亀田郷農民が決起し、救援の手が差しのべられ、團結と相互援助の精神のもとで崩壊した農業水路の掘削にあたりました。

この時の大形地区の農民は約1ヶ月におよぶ溜水と倒壊した建物の対応、今後の農作業計画などで疲れ切った最中であり、金郷からの応援は涙が出るほど嬉しいものであったそうです。

今一度我々の手であの美園を、住みよかった郷土を造りあげよう！その思いが亀田郷農民の心を突き動かし、金郷が一丸となって復旧活動に取り組み、亀田郷は再び美しい穀倉地帯へと復興を成し遂げました。

[illegible]

トパール、一〇メートル分

理事會。

農林省金子技官阿賀用 Waters を調査。

機能復旧事業にそなへ水害調査に着手。

電田警察に被害を報告する。

臨港線切り地三〇ミリのポンプを設置。

六月二十日

通船川四〇ミリアン二台、三五〇ミリ

のポンプ一台を追加設置。

栗の木機房一部被破損。

五号機は、タル取替等の要請。

八号機は、タル、ギヤ取替

理由。

十一号機、分解調査の要。

六月二十二日

新津耕地区対策工事について打合せ。

形状復旧、機能復旧など基本方針

針を立てるの急ぎであること。

六月二十二日

佐藤参議院内視察。

対策工事調査計画を樹て基本調査開始。

六月二十三

臨港線排水不良のため追加設置。

運搬不能となる。

山道用水路沿岸崩落。

六月二十四

新川機械運転をあきらめ、機場より阿賀野

川までの区間八キロは県国課の

責任工事で鉄入板工事を施行。

六月二十五

天野排水施設安全検査大廳。

津島尾地区的用水については：工部省公現調

を行ひ被害程度の地区民の協力

で水路を手廻し、用水を送る

計画を樹立。

新川機械先は七月一日まで大手八社で入札

規制する。

六月二十六日

通船川対策：下木戸、逢谷間、河原地区と

ブロック排水を計画実施。臨港

町、通船川には切戻の責任とする

六月十七日

通船川対策：堤防嵩上げに成功、臨時排

水を通船川に排水開始。

通船川再度上昇、嵩上げ不可能

となる。臨時ポンプを国道附近

に設置大排水を逆流排除を図

功。

下山排水機運転不能タゴボフ急送。

北陸農政局北川定宣名所、奥本庁、新津

耕地と打ち合せ。

緊急資材手配。

阿賀用水路分岐点欠陥か所地元で補修工事

に着手。

六月十八日

新川対策：新川機場沿の水脈規制のため手

持トラクタタイと遠藤組より

電力会社に排水機の送電手配。

機場調査：庄原、東北電工の技師来所。

通船川対策：臨港線切りのかたポンプ五台

を配置。ポンプ二台設置運転開始。

ためポソバ排水設備を整備する。

六月十九日

新川機場吐口で締切計画。

六月十九日

菅川応急工事資材発注：四メートルシ

